

# 「英語がわかる」ということ（１）

—英語前置詞 over の場合（イメージの力）—

高橋 順一

## On Understanding English (Part 1): the case of English Preposition 'over' (Power of Image)

TAKAHASHI Junichi

**Abstract:** In this article, I propose OVER as an image-schema and examine the relationship between the specific properties of this image-schema and the applications to the teaching English for our college students. First, I define the term 'image' and 'understanding'. Second, I analyze the research on the preposition OVER in Lakoff(1987) and Dewell(1994). Finally, I propose that arc-path schema provides the basis for explaining all of the variants of OVER using our power of image.

### １．はじめに

英語がわかるということはどういうことなのか、こんな素朴で基本的な問いが日々の学生への英語指導の中で突如として現れる。人間は身体に備わった様々な知覚器官を通じて世界の意味を認識し、それについての表象を形成する。言語（英語）は人間の認識活動や表象形成において知覚器官ときわめて重要な関連性を持っている。本稿の目的は、知覚と言語の関係はいかなるものか、知覚と言語がどのような関連性を持って、人間の認識活動や表象形成がなされるのか、という問いを手がかりに、「英語がわかる」ということの本質解明への手がかりを得ることである。そのため、本稿では、近年の脳科学、認知科学、言語学、生態心理学などの成果を踏まえ、そのメカニズムをサブテーマ「英語前置詞 over の場合（イメージの力）」を中心に考える。

### ２．イメージとは何か

人は様々なモノに対して様々なイメージを持つことができる。同様に、様々な言葉に対しても様々なイメージをもつことができる。このときのイメージとは何なのか。

ここで、イメージ (image) の定義を見てみたい。まず、『ランダムハウス英和大辞典』の定義を見てみる。

「(人、動物、物の) (肖) 像、絵画、肖像画; 彫像、人形、神像、偶像」、 「(網膜上に結ばれる) 像、(鏡、レンズなどによる) 像; (テレビ、映画などの) 映像、画像」、 「心象、表象、面影、残像; 概念、観念; 印象」 「(もとの刺激がなくても心に浮かんでくる) 像」 「形、姿、外形」 (p.1339)

広辞苑のイメージの項目は以下である。

イメージ【image】①心の中に思い浮かぶ像。全体的な印象。心象（しんしょう）。「完成した形を一する。」「一がわく」「企業一を高める。」②姿。形象。映像。

平凡社『大百科事典』では「イメージとは以前に知覚された、いくつかの感覚的性質を伴う対象についての心的表象である」という定義を与え、これには、写真、映像、絵画などのような「心的表象の物質化されたもの」と、想像の産物、夢想、白昼夢などのような「新しく作り出された心的表象」に大別している。平凡社『新訂小百科事典マイペディア』では、「形象と訳す。芸術作品によって描かれる感傷的、直感的表象。必ずしも事実の再生ではなく、比喩を用いる場合が普通である」(p.98)と定義されている。

また、講談社『大事典ナビックス NAVIX』では、イメージは次の定義である。

- image 1 感覚的・感情的・価値的な印象などを含み心の中に漠然と浮かぶ像。  
2 外界の情報が表象の形態として心の中に表現されたもので、視覚・聴覚など入力情報に依存している。心的イメージともいう。(p.205)

さらに、W.J.T. ミッチェル (1992) は、イメージの多様な形態を絵画、彫像、図案などの図示的なもの、鏡、投射像のような光学的なもの、感覚予見、感覚形相、仮象などの知覚的なもの、夢、記憶、観念、幻影などの心的なもの、隠喩、叙述などの言語的なもの、に分類している。このようにイメージの語義が示す対象は多様であることがわかる。本稿で扱うイメージは、ミッチェルの知覚的、心的、言語的なものをまとめたイメージを言語的イメージとして捉えることにする。なぜなら、知覚、心、言語は相互に関連性をもち、イメージ形成にとってきわめて重要な役割を担っているからである。

### 3. 「わかる」とはどういうことか

山鳥重 (2002) は、「わかる」とはどういうことか、という人間にとっての基本的な問いを投げかけ、この問題を脳科学の視点から、一般読者にわかりやすく説明している。山鳥氏は、まず、イメージという表現は、形あるもの、つまり、図像を意味し、あまり正確でないとして、心象（メンタル・イメージ）を用いている。以下に、心象の概要をまとめる。

心象は視覚、聴覚、臭覚、味覚、体性感覚（触覚、痛覚、温度覚、振動覚など）などすべての知覚を通して、心に浮かぶことのできるすべての現象を指す。さらに、心の働きの土台は知覚であり、五感を介したさまざまな対象を知覚することが「わかること」の原点である。この心象には、今・現在、自分の周りに起こっていることを知覚し続けている心象と、その知覚を支えるために動員される、すでに心に溜め込まれている心象の2種類があるとして、前者を知覚心象、後者を記憶心象と呼んでいる。「ことばがわかる」の第一歩は、ある音韻パターンと一定の記憶心象が結びついていることであり、心に記憶心象が喚起される必要がある。そのためには、相手と同じ心象を喚起するため、言葉の意味を正しく覚えていなければならない。さらに、「わかる」は言葉の記憶から始まり、言葉の記憶とは名前の記憶ではなく、その名前の「意味の記憶」であるとし、言葉の正確な意味理解を「わかる」ことの原点と捉える。この意味の記憶には、①事柄の意味、②関係の意味、③変化の概念がある。事柄の意味は、何度も繰り返し経験することで少しずつ作り上げてゆく記憶で、習い、覚えてゆくもので、繰り返すことにより同じ神経回路が活動す

る。これは神経系の働きの特徴であり、同じ神経回路が興奮すると、その回路を作っている神経細胞と神経細胞のつながりはだんだん強固になり、忘れにくくなる。意味の記憶は、具体的な経験を積み重ねるなかで、個別の経験の記憶が消し去られ、重なり合っている共通の部分だけが抜き出されて作り上げられる。関係の記憶は、事柄と事柄の関係がどうなっているかを理解することであり、われわれがさまざまな関係の中に生きていることを実証するものである。人間の関係、たとえば、親子関係、親戚関係などは、関係の記憶で、空間的關係としてイメージ化されている。この空間関係がイメージできないと人間の関係は理解できないことになる。関係の記憶は、モノとモノとの関係を空間関係としてイメージできる能力であり、意味理解能力の土台になっている。最後に、変化の概念も記憶の重ね合わせの中で抜き出される意味記憶のひとつであり、動きがイメージできなければ意味も成立しないとして、動詞概念の成立には、変化がイメージできることが必要であることを力説する。

以上、認識の脳科学の知見から、「わかる」ことの一端を見てきたが、ヒトの認識のメカニズムは、複雑でまだまだわからないことが多すぎるのが現状である。ここでは、知覚と言語は相互に関係し、心象が重要な役割を持っていることを確認する。

次に、言語の意味が＜知覚－運動＞的に世界を経験する身体にもとづいて規定されているとみる認知意味論の知見を見ることにする。

#### 4. イメージ・スキーマ (image schema) とは何か

イメージ・スキーマを定義すると「ことばの形成と概念化に先立って存在する心的表象に関わる認知能力の1つ」(『認知言語学キーワード事典』 p.13) となる。認知言語学では、イメージを人間の身体経験に基づいて捉える。たとえば、視覚は空間認知に関わるイメージ「上・下」「左・右」「前・後」「部分・全体」「中心・周辺」などを生み出すもとになっている。「前・後」は、人間にとって目や鼻など感覚器官のあるほうを「前」、その反対を「後」と捉えるイメージを持っている。これらの経験を抽象化・構造化して得られる知識形態がスキーマである。したがって、イメージ・スキーマは、身体経験をもとに形成されたイメージを、より高次に抽象化・構造化し、拡張を動機づける規範となるような知識形態である。よく知られているイメージ・スキーマとしては、「前・後のスキーマ」「遠近のスキーマ」「容器のスキーマ」「起点・経路・着点スキーマ」などがある。

マーク・ジョンソン (1987) は、イメージ・スキーマの次のように定義している。

「理解したり推理したりすることのできる、有意味で互いに結合された経験をもつためには、行動、知覚、概念作用がパターンと秩序をそなえなくてはならない。スキーマとは、これらの動的な秩序づけの活動にそなわる、反復されるパターン、形、規則正しさのことである。これらのパターンは、われわれにとって意味ある構造として、主として空間中でなされる身体運動、対象の操作、知覚的相互作用に創発する。」

このイメージ・スキーマの実在によって、われわれは自分の経験を理解することができるとし、ジョンソンは、「理解する」ことを次のように捉える。

「むしろ、理解とはわれわれが世界をわがものとする仕方、われわれが世界を理解可能な実在として経験する仕方である。それゆえ、このような理解はわれわれの存在全体一身体能力や技能、価値、気分や態度、すべての文化的伝統、言語共同体との結びつき、美的感受性などにかかわる。

要するに、理解とはわれわれの「世界内存在」の様態なのである。理解とは、われわれが身体による相互作用、文化制度、言語的伝統、そして歴史的文脈を通して世界に位置づけられる仕方である。」

イメージ・スキーマは、隠喩体系とともに身体化された文化にはめこまれた理解の構造として位置付けられる。

これまで概観してきた認知言語学特に認知意味論のイメージ論は、知覚的認識と言語的認識との間に構造的類似性があることを明らかにしたものである。すなわち、知覚的認識はイメージ・スキーマという回路を通して言語的認識の生成に関与するということである。結論として、認知意味論の「イメージ・スキーマ」という概念が知覚と言語の橋渡しをしていると言える。

次に、図解、図式によるイメージが「わかる」こと、特に「英語がわかる」ことの一つの有効な手立てであることを明らかにしたい。<sup>1</sup>

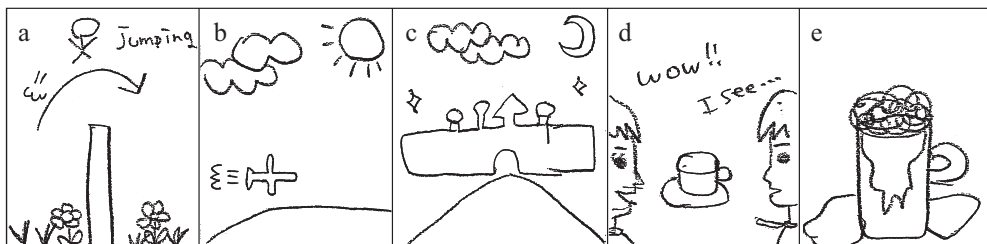
## 5. イメージ・スキーマによる授業実践と英語前置詞 over の分析

英語前置詞 over は、イメージ・スキーマによって、十分に説明可能であり、その説明は、学生にとって「英語がわかる」ことの具体的事例である。ここで取り上げる事例は、本学平成 17 年度第 1 回オープンキャンパス英米語学科ミニ講義で平成 17 年 6 月 25 日に実践したものである。ここに、本学 1 年生対象の「英文法・英作文」の授業実践とともにその概要を簡潔に述べる。

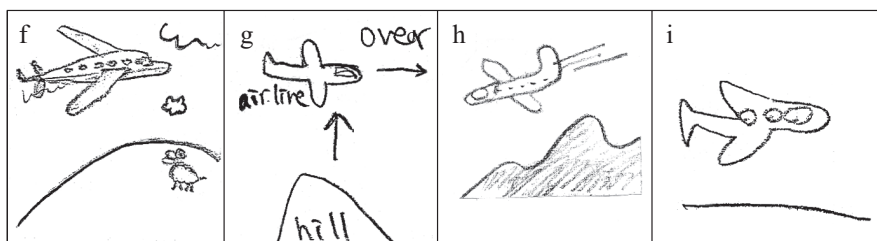
### 5.1 over のイメージによる授業実践

over のイメージを捉えるために、英文を読んでその意味をイメージし、絵にした。以下は例文 (1) ～ (5) とそのイメージ絵 a ～ e である。<sup>2</sup>

- (1) The man jumped over the fence.
- (2) The airline is flying over the hill.
- (3) There's a castle over the mountain.
- (4) We talked about it over a cup of coffee.
- (5) The beer ran over the side of the glass.



上の絵は数多くのイメージ絵の一例であるが、(2) のイメージ絵はこの他に次のような絵が見られた。



前置詞 over は、空間の位置関係として把握される。その際、f～i の絵に見られるように、飛行機の空間位置は様々である。ここで、前置詞 over の本質的な意味（コア）を把握し、それがどのような原理で意味が拡張されるかを理解することが重要である。(1)～(5)における over の共通したイメージは、次のように図示される。図1は、over のイメージ・スキーマである。(1)～(5)の絵は、図1を図2のように焦点化したものである。図2の①は「～を超えて」、②は「～の上に」、③は「～の向こうに」、④は「～を覆って」の意味を持つことになる。

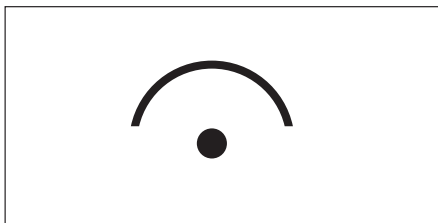


図1 over のコア・イメージ

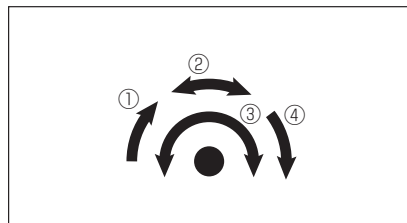


図2 焦点化された over のコア・イメージ

したがって、(2)の意味は、イメージ絵 f～i のような絵が可能である。因みに、f は飛行機が丘を越えて飛んでいる。g は飛行機が丘の上を飛んでいる。h は飛行機が丘の向こうに飛んでいる。このように、図1のコア図式は、上記3つの視点が関与し、焦点化されたものが図2である。図2の④の解釈の例文は、次の(6)～(9)である。

- (6) Put the blanket over me.      (7) Spread this cloth over the table.  
 (8) We talked over the pollution problem.      (9) Spread a lot of butter over the bread.

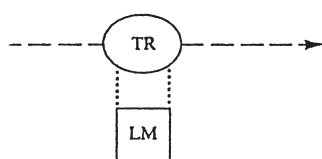
## 5.2 前置詞 over の分析<sup>3</sup>

前置詞 over について、認知言語学で最初に、詳細な研究をしたのは、Brugman(1981)である。その後、Lakoff(1987), Dewell(1994)などが Brugman を改良し、現在に至っている。

### 5.2.1 Lakoff(1987)の分析

Lakoffの基本的考えは、over が空間的意味を持ち、その様々な意味はイメージ・スキーマによって捉えられる。このイメージ・スキーマは、身体的、知覚的に繰り返し経験を抽象的レベルで構造化したものである。Lakoffは、over の様々な意味は、具体例のリンク、類似性のリンクを持ち、プロトタイプの意味を中心に拡張する放射状カテゴリーを形成する、と考えている。次に、over の具体例を概観する。

- (a) 中心的な意味：「上方を横切る (above-across)」  
 (9) The plane flew over. (飛行機が上空を飛んでいった。)



トラジェクター (TR): 一番際立つ図: 飛行機  
 ランドマーク (LM): 一番際立つ地: 不特定

図3 (9)のイメージ・スキーマ



- (10) The bird flew over the yard. (鳥が庭の上空を飛んで行った。)  
 (11) The bird flew over the wall. (鳥が壁を越えて飛んでいった。)  
 (12) The plane flew over the hill. (飛行機が丘の上空を飛んで行った。)

(10)～(12)のイメージ・スキーマは、次のように示される。

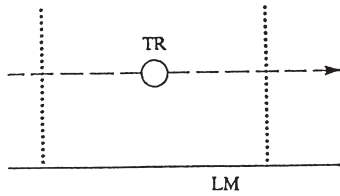


図4 (10)のイメージ・スキーマ

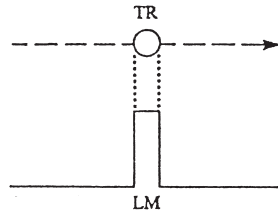


図5 (11)のイメージ・スキーマ

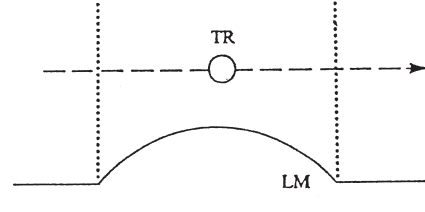


図6 (12)のイメージ・スキーマ

(b)「上に (above)」の意味

- (13) Hang the painting over the fireplace. (その絵を暖炉の上に掛けなさい。)

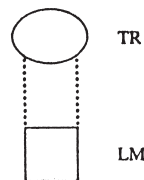


図7 (13)のイメージ・スキーマ

Lakoff (1987) は、over のスキーマとして図 3, 7 の他に「覆う (covering)」の意味、再帰的スキーマ、超過のスキーマ、反復のスキーマを挙げている。

### 5.2.2 Dewell (1994) の over 分析

Dewell は、Lakoff のイメージ・スキーマやイメージ・スキーマ変換の重要性を強調する。Dewell の中心的スキーマは次の図 8 である。

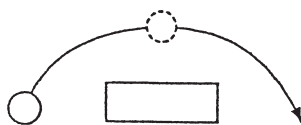


図8 Dewell の中心的スキーマ

図 8 は、ランドマークを半分取り囲む「半円形の経路」である。このイメージ・スキーマの特徴は、Brugman や Lakoff のように over の分析において、across/ above を下位スキーマとする必要がないことである。さらに、ランドマークの形を規定する必要がなくなり、トラジェクターの軌道によって半分取り囲まれるものである。これまで観察した学生のイメージによる絵との共通点も持つことになる。次に、この中心的スキーマからイメージ・スキーマ変換によってどのような具体例があるかを見る。

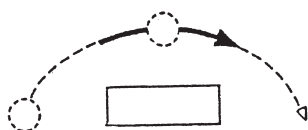


図9 (13)(14)イメージ・スキーマ

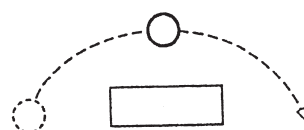


図10 (15)のイメージ・スキーマ

(13) The plane flew over the hill.  
(飛行機が丘の上空を飛んでいった。)

(15) The plane should be over Baltimore  
by now. (飛行機は今頃ボルチモア上空にいる  
ことだろう。)

(14) The bird flew over the yard.  
(鳥が庭の上空をとんでいった。)



図 11 (16)(17) のイメージ・スキーマ

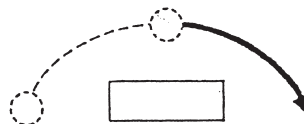


図 12 (18) のイメージ・スキーマ

(16) The plane climbed high over the city.  
(飛行機が都市上空に上がっていった。)

(18) Sam fell over the cliff.  
(サムががけの上から落ちた。)

(17) The sun came up over the mountain.  
(太陽が山々の上へ上がってきた。)

以上、over の中心的スキーマから、いくつかのイメージ・スキーマ変換を通して、様々なイメージ・スキーマが作り出されることを見てきた。<sup>4</sup>

## 6. おわりに

これまで、「英語がわかる」ということはどういうことかをさまざまなイメージ論から検討してきた。具体的イメージを捉えるために、英語前置詞の over を中心にその空間的位置の意味を Lakoff と Dewell のイメージ・スキーマによって見た。この空間的イメージ・スキーマは、時間関係、社会関係、心理関係の領域に意味が拡張して、豊かな over の世界を作っている。<sup>5</sup>「英語がわかる」ということはこのようなイメージ・スキーマを解釈 (construal) することである。学生への英語指導では、学生が持つイメージ力を活性化することが重要である。

## 註

- 1 このような絵や図式によってイメージ化を図った英語教科書、参考書、研究書が多く出版されている。例えば、松永暢史 & 河原清志 (2003) 『絵で英文法』株式会社ワニブックス、大西泰斗 / ポール・マクベイ (1996) 『ネイティブスピーカーの前置詞—ネイティブスピーカーの英文法 2』研究社出版、田中茂範 / 佐藤芳明 / 河原清志 (2009) 『NHK 新感覚☆キーワードで英会話イメージでわかる単語帳』日本放送出版協会、アンドレア・タイラー / ビビアン・エバンズ 『英語前置詞の意味論』国広哲弥 (監訳) 木村哲也 (翻訳) 研究社出版など。
- 2 イメージ絵は、本学 1 年生「英文法・英作文」の授業で学生が描いたイメージ絵からいく枚かを選んだものである。学生はイメージを的確に表現することに優れている。
- 3 以下の Lakoff, Dewell の前置詞分析は、河上誓作編著 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社出版の 3.3.2.2. 語彙的ネットワーク：複数のカテゴリーにわたる over の場合 (pp.82 ~ 109) による。本文では over の分析が詳細に説明されている。

- 4 over の意味ネットワークについては、アンドレア・タイラー／ビビアン・エバンズ (2005)『英語前置詞の意味論』研究社出版、ディビット・リー (2006)『実例で学ぶ認知言語学』大修館書店を参照。Andrea Tyler and Vyvyan Evans (2001) *Reconsidering Prepositional polysemy networks: the case of over* は有益である。インターネットでダウンロード可能。
- 5 イメージ・スキーマの拡張については、Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam を参照。

## 参考文献

- Brugman, Claudia. 1981. *Story of 'Over'*. M. A. Thesis. Berkeley: University of California.
- Dewell, Robert B. 1994. "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis". *Cognitive Linguistics* 5:351-380.
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination and Reason*. Chicago Press: University of Chicago Press.
- (菅野盾樹・中村雅之 (訳) (1991)『心の中の身体』紀伊國屋書店)
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- (池上嘉彦・河上誓作他 (訳) (1993)『認知意味論：言語から見た人間の心』紀伊國屋書店)
- 辻 幸夫編 (2002)『認知言語学キーワード事典』研究社.
- W.J.T. ミッチェル (1992)『イコノロジー』勁草書房.
- 山鳥 重 (2002)『わかるということ』ちくま新書、筑摩書房.

## 辞典、事典類

- 『ランダムハウス英和大辞典』小学館、第2版、1994年。
- 『広辞苑』岩波書店、第4版、1991年。
- 『大百科事典』平凡社、1993年。
- 『小百科事典』平凡社、1994年。
- 『大事典ナビックス』講談社、1997年。